

後期課程(秋季入学試験)

平成 26 年 10 月 4 日

科目名	受験番号	採点欄
日本語	氏名	

問題：次の文章は、翻訳も行う作家である片岡義男と、英語文学翻訳家である鴻巣友季子が翻訳について語り合っているものである。この文章について下の問に答えなさい。

鴻巣 翻訳者は黒子たれ、「透明な」翻訳をしろ、と私も駆け出しの頃に叩きこまれました。原文が透けて見えそうな直訳のほうが忠実に見えますし、私もそう心がけてきました。しかしこの頃実感するのですが、日本でいう「透明な翻訳」と欧米で言う「透明な翻訳」はよく似て見えて、じつは正反対なのです。日本では翻訳者が引っ込んで原文が透けて見える overt translation (明白な翻訳) を「透明な翻訳」と言いますが、欧米では最初からその言葉で書いてあるような、翻訳作業や原文そのものが消えている covert translation (隠れた翻訳) を「透明な翻訳」と言うのです。

片岡 それは面白い。日本で行われているような翻訳も、欧米で言われているような「透明翻訳」に向かいつつあるのですね。

鴻巣 このふたつのちがいについてはもう何十年も考えていますが(笑)、数年前にそれを実感したのは、村上春樹のロシア語翻訳者と話したときでした。最初からロシア語で書かれたように見せるには相当の操作が必要です。ある種の同化翻訳といいますか。たとえば日本のよくわからないお祭りが出て来たら、ロシアのお祭りに置き換えてしまうといった操作ですね。欧米ではいままで、同化翻訳が圧倒的に主流で、だからこそ反撥もあり、いま考え直されて原文重視の流れがようやく出てきています。日本では、早くも明治二十年代には、黒岩涙香がやっていたような翻案や同化翻訳に対して疑義が呈されて、直訳志向が強くなり、そのまま百何十年も来ました。いまも基本的には訳者の存在というノイズが見えない混じり気のない(と思える)健康食品みたいな翻訳は支持されていますが、この十年余りでしょうか、翻訳の独創性とか、原文から独立した芸術性ということが謳われるようになってきました。

片岡 翻訳の原文忠実度を測る基準として、原文が透けて見えることが求められたのですね。それがいわゆる「翻訳調」という文章の書き方ですか。これから読者に求められるのは、まるで原文で読んでいるような気分させてくれる翻訳でしょう。

鴻巣 「翻訳調」と言うたいてい悪口で嫌われるのですが、実際は忠実であるがゆえに尊ばれもしているのです。そのあたりにアンビヴァレンツがあります。

片岡 原文の構造が透けて見える日本語の文章はけっして悪いものでなく、たいへん面白いものです。

(中略)

鴻巣 80~90年代に「生硬な翻訳である」と言われるのは、翻訳者にとって異端宣告にも等しい恐ろしいことでした(笑)。

片岡 僕の小説の文体は、ある時期、翻訳調、翻訳文体などと評されました。それはそれで、僕としては悪い気分ではないのですが。

鴻巣 最初に翻訳調と言いついたのは誰だったんでしょうね。片岡さんは翻訳のお仕事から始められて、小説を書き出されたときには、特に翻訳調で書こうとしたわけではないですよね。

片岡 翻訳調で書こうなどとは思いません。小説のために使う自分の日本語を発見しなければならないという努力の結果であって、翻訳文体で書こうという目標があったわけではないのですから。

(『翻訳問答：英語と日本語行ったり来たり』片岡義男・鴻巣友季子(左右社)より)

問1 次の漢字の読み方を()の中にひらがなで書きなさい。

- (1) 翻訳() (2) 透明な() (3) 駆け出し() (4) 直訳() (5) 忠実()
 (6) 実感() (7) 正反対() (8) 欧米() (9) 原文() (10) 操作()
 (11) 置き換えて() (12) 圧倒的() (13) 主流() (14) 反撥() (15) 疑義()
 (16) 志向() (17) 健康食品() (18) 独創性() (19) 芸術性()
 (20) 謳われる() (21) 尊ばれ() (22) 生硬な() (23) 異端宣告()

